



隠れキリシタン（下）

（上五島・長崎巡礼②）

江戸時代のキリスト
禁教令下での厳しい弾
圧の中、一部の宣教師

は潜伏して信徒の司牧
にあたった。しかし
次々に摘発され、一六

四四年、日本人最後の
宣教師、小西マンショ
の殉教で日本には一人
の神父もいなくなっ
た。表面的には仏教徒を
装いながら密かに信仰

を守っていた各地の隠れキリシタンは次第に減少し、彼らの死によって日本のキリスト教信仰は消滅したと思われていた。

ところが長崎の隠れキリシタンだけは信徒独自の組織を作り、明治六年の禁教令撤廃までの二百五十年間、信仰を伝承し続けていたのである。

「なぜ長崎だけが」という思いがある。要因の一つにキリシタン大名の有馬晴信や大村純忠によって長崎の浦上村などがイエズス会に寄進され、住民のほとんどが洗礼を受け、祈りなどの信仰教育が徹底していたことが挙げられる。

が、最大の要因は一人の神父も存在しない状態になった時、孫右衛門という有能なリーダーが信仰を伝承する組織を作ったからだ。それによって集落ごとの団結力の強い組織で信仰が伝承されたのである。

高井旅教会（像の下に「天に栄光、地に平和」とある）



禁教令撤廃後も集落

話があった。

残った

カクレの

話

川添神父のエッセイ集



今回訪れた上五島の高井旅、福見の集落は撤廃後六十五年間、カクレキリシタンであったが、昭和十三年に全員がカトリック教会に復帰し、高井旅教会、福見教会を建設したようなケースもある。笑い話のような事例。

今回一緒に旅した近藤氏（幼少時代、上五島に住んでいた）の親せきに川添猛神父（現・熊本帯山教会主任）がいる。ウィットに富んだエッセイを書かれることでも有名で、神父のエッセイ集四冊を近藤氏から借りて読んだ。その中に「隠れ集落秘話」があった。

全員が同じ行動をとることで出した結論とは「カトリックには復帰せず、この際、カクレキリシタン信仰も捨てる」であった。一人の聖職者も存在しないという非常事態で信徒が独自の組織をつくり、その信仰を二百五十年間も守り続

けた隠れキリシタン。カトリック教会に限らず宗教は聖職者に依存し、受け身になりがちな信徒の信仰。隠れキリシタンを単なる歴史上の出来事としてとらえるべきではない。生き生きとした自立した信仰へのヒントがここにあるように思える。そうしないと信仰は形骸化し、笑い話のようなカクレキリシタンの話になるのではあるまいか。（元山口放送取締役ラジオ局長）